

教職員ボランティア活動に参加して

阿部 岳

農学系技術室農業生産グループ

1 はじめに

平成23年3月11日の東日本大震災では、あまりにも被害が甚大で最初何が起こったのか信じられなく、徐々にその災害の規模が明らかになるにつれて、何か自分にできることはないかと考えていた。岩手大学の復興支援が様々な形で行われる中で教職員ボランティア活動募集の知らせを聞きすぐに参加することを決めた。このボランティア活動に参加したので報告する。

2 教職員ボランティア活動とは

このボランティア活動の参加者は教官、事務系、技術系、すべての大学関係者（学生は除く）で構成される。各自、参加日を申し出ると同日に参加するメンバーが数名あり、参加人数によってライトバン、ワゴン車、貸し切りバスと移動する車が決まる。様々な方々と一緒に1日活動をする。主なボランティア活動場所は宮古地区と釜石地区だった。宮古、釜石両地区とも災害ボランティアセンター（VC）が窓口となる。到着すると受付をし、班構成になっていて岩手大学は何班になり、場所と作業の内容が決まるという流れだ。班の構成人数は数名から50名ぐらいまで様々で、その日何の作業をするかによって変わる。朝大学前を出発し、現地に着き、ボランティア活動を行い夕方帰るという行程で活動した。

3 活動内容

宮古地区の活動は津軽石町の水産会社前の側溝とヒューム管にたまった砂の除去（図1）、田老町の倒壊した民家の基礎の中に入った砂と石等の除去（図2）、同じく田老町の商店の部屋にたまった砂の除去（図3）、磯鶏地区仮設住宅内のコミュニティセンターの1日運営、釜石地区は松原町の工場内敷地の草刈りと瓦礫の方付け（図4）、中妻町の釜石中学校の花壇作成と設置（図5）と私が参加させてもらった活動である。



図1 津軽石町 側溝の砂の除去



図2 田老町 民家の砂と瓦礫の撤去



図3 田老町 商店内 部屋の砂の除去



図4 松原町 工場内の草刈りと瓦礫の撤去



図5 中妻町 釜石中の花壇作りと設置

期間は6月末から10月末まで参加した。写真を図として示した。

4 活動に参加して

最初に参加した時はあまりにもひどい被害の大きさとそこに立ち向かう人たちの悲痛な叫びみたいなものを感じた。

とにかく与えられた作業を行い何かしらの力になればという思いだった。作業をされていて一緒に参加した方々も皆同じ気持ちだったと思う。何回か参加していると作業内容に変化がみられた。最初は個人、次に会社、または公的機関へと時がたつにつれて変わった。これは徐々にではあるが復興の兆しが見えてきているということだろう。作業をした所の住民の皆さんは前向きにこの困難を乗り越えようとしていたのが印象的だった。

5 まとめ

震災が起こってから、人命救助、情報収集の点で考えたことがある。人命救助はもちろん私たち素人が災害現場に行き救助活動はできるとは思はないが早く助けてあげたい思いで一杯だった。確かに皆が一斉に押しかけた場合道路は混みあい渋滞をまねき物理的にも無理なのか。何かいい方法はないのだろうか。広範囲に災害が起こった時の対策が望まれる。情報収集ではどうか、携帯電話はつながらないことが分かった。アマチュア無線はどうだろうか。私は昭和58年にこの免許を取ったが、その時講師の方が昭和46年7月零石で起こった飛行機事故の時、零石と盛岡間を無線で中継したと聞いたことがあった。ハンディ機なら小型のものがあ、単3電池数本で10時間は交信できる。144MHz帯と430MHz帯を1つに搭載したハンディ機もある。何よりも通信距離は平地で障害物がなければ5-6キロメートル（両方ハンディ機の場合）は届くだろう。発泡スチロールの容器にコンパクトにまとめられる。そうすれば上空から投下してもよいだろう。波長2mの場合145.00をメインに開けておくなど基本的なルールさえ守れば144MHz-146MHz帯は100チャンネル使えることになる。非常時には免許がなくても誰でも通信可能にする法的改正が必要になる。収集した情報をどのようにするか。今回の大震災は今後の防災対策に大きな課題を投げつけたように思っている。これから起こるであろう災害に想定外ということではかたづけられないことを物語る。後世の人々のために少しずつ対策を整えていかなければならない。

6 最後に

このボランティア活動と一緒に参加された皆様に感謝いたします。移動の車内では、自己紹介や自分の震災時の話、ボランティア活動時住民の皆様から聞いた震災時の話、方付け作業の話、思うように作業が進まなかった事、逆に住民の皆様にも勇気づけられたことなどなど、話をしながらいつの日か復興される日を願う気持ちを新たにするのでした。これからも微力ですが活動したいと思います。復興する日まで。